

中世の人物

京・鎌倉の時代編

第一巻 □ 冊

全三巻 □ セット

注文します

ご住所

お名前

TEL

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内 2丁目8番5号

中世の人物

京・鎌倉の時代編

全三巻の構成

編者 元木泰雄・野口実・平雅行

第一巻 保元・平治の乱と平氏の栄華

元木泰雄編

第二巻 治承〜文治の内乱と鎌倉幕府の成立
野口実編

第三巻 公武権力の変容と仏教界

平雅行編

I 鳥羽院政と保元の乱

鳥羽院・崇徳院 崇徳院政の夢……………佐藤健治
 藤原忠実 辛酸を嘗めて中世を切り開いた摂関家長……………佐古愛己
 藤原頼長 苦闘する大学者……………横内裕人
 平 忠盛 都鄙で広がる京武者の舞台……………守田逸人
 源 為義 保元の乱における実像……………須藤 聡
 覚仁と信実 悪僧論……………久野修義
 阿多忠景と源為朝 その伝説と実像……………栗林文夫
 コラム 王家の乳母……………野々村ゆかり

II 平治の乱と後白河院政の成立

後白河院 暗主の波乱万丈の生涯……………高橋典幸
 藤原忠通と基実 院政期摂関家のアンカー……………樋口健太郎
 信 西 中世を拓いた稀有の天才……………木村真美子
 藤原信頼・成親 平治の乱と鹿ヶ谷事件……………元木泰雄
 藤原経宗 拷問を受けた有識の公卿……………元木泰雄
 源 義朝 最初の武士の棟梁……………近藤好和
 コラム 院と去能者たち……………辻 浩和

III 平氏の栄華

平 清盛「おこれる」権力者の実像……………川合 康
 池禅尼と二位尼 平家の後家たち……………栗山圭子
 平時忠と信範「日記の家」と武門平氏……………松園 斉
 藤原邦綱とその娘たち 平清盛の盟友／近衛家の忠臣……………佐伯智広
 平 重盛 一門栄耀の反照……………平藤 幸
 西 行 秀郷流故実の継承者……………近藤好和
 コラム 京武者たち……………元木泰雄

I 列島を覆う戦雲

源頼政と以仁王 摂津源氏一門の宿命……………生駒孝臣
 甲斐源氏 東国に成立したもう一つの「政権」……………西川広平
 木曾義仲 反乱軍としての成長と官軍への転換……………長村祥知
 源義経と範頼 平氏追討の戦い……………宮田敏三
 平 宗盛 悲運の武家の棟梁……………田中大喜
 平氏の新旧家人たち 相伝家人と門客……………西村 隆
 藤原秀衡 奥の御館と幕府構想……………三好俊文
 コラム 乳母と乳母子―頼朝と義仲……………糟谷優美子

I 承久の乱と朝廷

後鳥羽院 万能の君の陥辱……………美川 圭
 九条道家 院政を布いた大殿……………井上幸治
 西園寺公経 当世の重臣、比肩すべき人無し、諸事思うがごときの人なり……………山岡 暉
 藤原秀康 鎌倉前期の京武者と承久の乱……………長村祥知
 藤原定家 歌の切り棄て「かた腹いたや」……………谷 昇
 コラム 動揺する仁和寺御室……………金 正文
 II 執権政治をめぐる群像……………坂井孝一
 源 実朝 青年將軍の光と影……………黒嶋 敏
 北条義時 義時朝臣天下を并吞す……………田辺 旬
 北条泰時 東西文化を融合させた宰相……………菊池紳一
 北条時房と重時 六波羅探題から連署へ…久保田和彦
 九条頼経・頼嗣 棟梁にして棟梁にあらず……………岩田慎平
 摂家將軍の蹉跌……………小野 翠
 竹御所と石山尼「家」をつないだ女性たち……………真鍋淳哉
 三浦義村 八難六奇の謀略、不可思議の者……………佐藤雄基
 大江広元と三善康信「善信」京・鎌倉をむすぶ……………野口 実
 文士のつながり……………赤澤春彦
 宇都宮頼綱 京都で活動した東国武士……………野口 実
 コラム 鎌倉幕府と陰陽師……………平 雅行
 III 顕密仏教と禅律僧……………菊地大樹
 慈 円 法壇の猛将……………平 雅行
 聖 覚 エリート学僧の挫折……………海老名尚
 定 豪 鎌倉幕府の政僧……………原田正俊
 円 爾 公武の帰依と南宋文化……………細川涼一
 観 尊 宗教的 平和 運動と鎌倉下向……………横内裕人
 コラム 東大寺宗性―学僧多忙……………下村周太郎

中世の人物

京・鎌倉の時代編 全三巻

編者 元木泰雄・野口実・平雅行

第一巻 保元・平治の乱と平氏の栄華

第二巻 治承〜文治の内乱と鎌倉幕府の成立

第三巻 公武権力の変容と仏教界

いずれもA5上製 カバー装 各420ページ 各巻予価4500円＋税

清文堂出版

〒542-0082 大阪市中央区島之内 2丁目8番5号
 電話06(6211)6265 FAX06(6211)6492
 ホームページ = <http://www.seibundo-pb.co.jp>
 メール = seibundo@triton.ocn.ne.jp

← 図版(上から) ● 平治物語絵巻 (信西巻 部分 静嘉堂文庫美術館蔵) ● 一本春日権現験記絵巻 (部分 東京国立博物館蔵) ● 法華経「久能寺経」(部分 東京国立博物館蔵) ● 版島(船附理人写真集「よ」)



諸行無常の響あり。清盛の栄華を軸に、

諸勢力の興亡を描く。

第一巻 保元・平治の乱と平氏の栄華



見其身而為法文見諸佛身相金可
 為四衆所敬一切以梵音聲讚諸法
 法最喜如為法最得他權位證不退智
 知其心深入佛道即為授記廣說正覺
 其喜男子意於末世得最尊貴使二文道
 上嚴淨廣大無比亦有四衆合掌禮法
 見自身在山林中修習善法證諸寶相
 八種定見十方佛
 保身金色百福相續嚴闍婆為人說者有父少妻
 母作國王捨嚴舍屬及上妙女欲行諸行在傷
 菩提樹下而為師子坐衣道過七日得諸佛之智
 無道已觀其無法輪為衆說法運十方億劫
 為諸佛法度最尊最上後當入涅槃如須臾證
 後念世中究竟第法是人得大利如之諸功德



中世の人物

京・鎌倉の時代編

全三巻

編者 元木泰雄・野口実・平雅行

清文堂

新鮮で魅力的な時代像を期待

京都大学名誉教授 上横手雅敬

清文堂出版では、刊行中の『古代の人物』全六巻に次いで、『中世の人物 京・鎌倉の時代編』全三巻の刊行を始めるという。保元の乱前後から鎌倉中期ごろまでを対象としている。「第一巻 保元・平治の乱と平氏の栄華」「第二巻 治承―文治の内乱と鎌倉幕府の成立」「第三巻 公武権力の変容と仏教界」から成り、政治史が中心であるが、仏教史にも配慮が加えられている。編者は元木泰雄・野口実・平雅行氏であり、広い識見と展望を持ち、現在の中世史学界をリードしている人々である。

七〇ほどのテーマが立てられ、数十名で分担して執筆している。これらの執筆者は、比較的若いのが、現在もっとも精力的に研究を進め、次々に成果を生み出している。従って日本中世史に関する最新の見解が、平易な語り口で読者に伝えられると思う。

平安後期から鎌倉中期まで、一〇〇年ほどの期間に七〇近いテーマとなれば、かなり詳細な内容となり、

人の組み合わせの妙

立正大学文学部教授 村井章介

人物に即して歴史を描くという手法は、読者にとって過去に寄り添いやすいせいか、幾度も試みられてきた。そんななかで、今回の『中世の人物 京・鎌倉の時代編』全三巻には、ひと味ちがった工夫が見られる。

それぞれ斯界を代表する学者を編者とする三巻は、タイトルからもわかるとおり、一二世紀なかばからの約一世紀という比較的短い時期に絞りこまれ、しかも、各巻四〇〇ページを超えるボリュームに、二〇本ほどの本論と三本のコラムが配されている。その結果、時代相を論者たちがどのように切り取ったか、さまざまな角度から楽しむことができるようになっていく。たとえば、保元の乱について、鳥羽院と崇徳院、藤原忠実、同忠通、同頼長、源為義、阿多忠景と源為朝といった、多彩な人物の眼を通して、しかも各論者の独創的な見解に膝を打ちつつ、多面的に学ぶことができる。

テーマの立て方にも工夫がこらされている。個人に還元してそれぞれの人生を満遍なく叙述するのでなく、各人が歴史のなかで際立った役割を演じた時期に

焦点を合わせ、しかもできる限り他者や人間集団との関係に即したかたちで（コラムでは人間集団そのものをテーマとする）、テーマが選ばれている。

たとえば、鎌倉幕府初期について見ると、源頼政と以仁王、源義経と範頼、和田義盛と梶原景時、北条時政と牧の方、大江広元と三善康信などといった組み合わせが挙げられており、個人単位の人物史とは異なるデュアルな歴史像が描き出されるであろう。

以上のような編集方針の成果として、従来の企画では取り上げられにくかった人物を掬いとることができた。信実、阿多忠景、藤原経宗、池禅尼、二位尼、源範頼、大庭景親、城助長、同助職、藤原秀康、九条頼嗣、三善康信、宇都宮頼綱、聖覚、定豪といった顔ぶれである。女性と僧侶を積極的に取り上げようという方針も窺える。

もちろん、後白河院、平清盛、源頼朝、後鳥羽院といった大物には、しかるべき論者と紙数が用意されている。

創見にみちた本シリーズが広く読まれ、続編の企画へとつながることを期待したい。

一人一人の物語が浮かび上がる

青山学院大学文学部教授 佐伯真一

歴史や古典文学の楽しさの原点は、その時代を生きていた一人一人の人物について考えるところにある。もちろん歴史学は、個人を越えたところで歴史を動かす大きな力について考えるのだろうし、文学研究は、実際の歴史事実とは異なる虚構の世界を考えるのではあるけれど、学問を志したきっかけは、英雄的な武将にაცოგれたり、不思議な女性について調べたり、といったことだったという研究者も多いだろう。そして、あれこれ考えた末に、結局はある人物の人生をたどってみるという研究に至ることも少なくない。いわゆる源平合戦期の前後、平安末期から鎌倉時代が、そうした楽しさをかきたてる物語性に富んだ人々の宝庫であることはいまでもないだろう。一人一人の人生をたどれば、そこには、一人一人を主人公とした物語がある。

歴史ドラマは、えてして現代のホームドラマや企業ドラマに翻案したお話になってしまいがちだが、ここでいう物語は少し違う。中世に生きた人々は、私たちとは習慣も考え方も感じ方も全く違っている。そんな人々が、宮廷で、戦場で、あるいは寺院の中で、他の人々とどんな人間模様を織りなしながら生きたのか。

私たちは、自分たちの世界に彼らを呼んで来ようとするのではなく、彼らの世界に飛び込んでゆかねばならない。その世界では、今まで全く知らなかった奇怪な人物を見つけたり、知っているつもりだった人が実は全く違った風貌を持っていることに気づいたり、といった新鮮な驚きの数々が私たちを待っているはずである。

このシリーズは、この時代を生きた一人一人に即して、その人生を明らかにする。執筆陣には、現在の歴史学の最前線にいる方々が総動員で、また適材適所で配置されていて、実に壮観である。歴史学は日進月歩、一昔前の常識はすっかり通用しなくなっているが、そうした最新の成果を盛り込みながら、わかりやすい解説が展開されている。読めば読むほど、この時代を支えた個性的な人々の顔が新たに現れてきて、わくわくさせられる。そして、「この人の眼には、世界はこんな風に映っていたのか」という想像が次から次へと働いて、歴史の全体像が立体的に立ち上がってくるのである。是非、多くの読者が手にとって、魅力的な人物の物語を一つ一つ浮かび上がらせながら、この時代をたどる興奮を味わっていたきたい。